

学びの基礎を培う遊びの充実を目指して

—豊かな感性と表現をはぐくむ遊びの環境と援助を考える—

川口明子* 下山恵・米田早織

千葉紅子・菊池恵子・石川幸子・小川恵美子**

*岩手大学 **岩手大学教育学部附属幼稚園

1. はじめに

幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであり、何よりも幼児の主体性を大切にされたものである。幼児自身が興味をもって周囲の環境に働きかけ、自ら遊びを見出し、心行くまで遊びきった満足感や充実感を味わう中で、自己が形成され、自己の可能性が開かれていく。また、遊びや生活を通して、多様な体験を重ねる中で、健康な心や体、人とかかわる力、感性や表現する力などがはぐくまれ、生きる力の基礎が培われていく。

今年度は、生きる力の一つである感性や表現する力を培うため、幼児の遊びを表現として受け止め、幼児が感じ表していることの意味を探り、幼児理解を深めていくとともに、幼児の表現を引き出す遊びの環境や援助のあり方を探ることにした。

2. 研究の方法

- 研究保育において、対象児の観察記録をとる。
- 幼児の感じ表していることの意味や幼児の遊びと環境や援助との関係を捉え考察する。

3. 事例

年少児6月「葉っぱの傘」

朝からどんより曇り、ときおりポツンと雨が落ちてくるような天候の中、アスレチックの上で、K児がユリノキの葉を一枚とると、自分の髪に留めようとしていた。自分では留めることができず、「ねえ、ここに留めたいの。」と言うので、K児から葉っぱを一枚受け取り、髪に留めてやった。「似合うね。」と声をかけると、「これ、傘。」と得意げに答えた。「そう、傘なの、いいねえ。これなら雨が降ってきても大丈夫だね。」と感心しながら答えると、「そうだよ。かさはいっぱいあるよ。あっちはかさやさんなの。」とユリノキの方を指さし、嬉しそうな表情を見せた。そしてさらに、「かっぱも

なきゃ。いい方法がひとつ。葉っぱをいっっぱい集めてテープで留めたりするの。」と言い、自分で作ったカバンにつけていたこれまた自分で作ったと思われる携帯に手を触れながら、「メールをするときは、このボタンを押すの。パパやママに雨が降ってきたってメールするの。」と教えてくれた。

【考察】

どんよりと曇って、薄暗く、今にも雨が降り出しそうな天候が、K児の感性を揺り動かし、いつもそこにあるものでありながら、ユリノキの葉の形が、傘のイメージと重なり、「傘に見立てて遊び使う」という行動につながったと思われる。さらに、そのK児の表現に対して、「似合うね。」「これなら雨が降ってきても大丈夫だね。」と、感心したり、共感したりという教師のかかわりが、「かっぱもなきゃ。」とか、自分で作った携帯を、「雨が降ってきたらパパやママにメールをするの。」というように、K児に内在するイメージを引き出していったと思われる。

4. 成果と課題

- 自分なりの表現を楽しみ、繰り返し取り組めるような時間や空間の保障、本物らしさを追及できるような素材、道具、文化財などを必要に応じて使えるような環境、互いの表現を受け止め、響き合う集団の育ちが豊かな表現を生み出していく。
- 幼児の豊かな感性と表現をはぐくむためには、幼児の表現を共感的に受け止めることが何より重要であるが、同時にその難しさも痛感するところである。教師自身の幼児の表現を理解する力量を高めることが課題となった。

平成23年度研究主題

学びの基礎を培う学びの充実を目指して
—豊かな感性と表現を育む遊びの環境と援助を
考える—

1. はじめに

1年次は、幼児が表す行為を内面の世界の表現と捉え、幼児が感じ表していることの意味や自己を表現しようとする意欲を引き出している環境や援助との関係を捉え考察し、幼児の表現の意味を探り、幼児理解を深めてきた。2年次は、幼児の表現の意味を探りながら、心揺り動かすような体験や友達とのやりとりの中で、他の幼児の表現を受け止めたりするような体験を通して表現が深まったり広がったりしていくような環境や援助の工夫を試みてきた。さらにその実践を指導資料として整理すると共に、表現にかかわる各年齢毎の発達の過程を作成した。

2年間の研究を通して、幼児の行為を表現として受け止めること、幼児が感じ表していることに共感し、応答する教師のかかわりが、表現への基盤をつくることを確認した。一方で、幼児の表現には、教師の幼児理解や教師と幼児との関係性が反映される。幼児の表現の捉え方によっては、援助の方向を見誤ってしまう。これまでの研究を通して、豊かな感性と表現をはぐくむためには、その前提として、幼児理解を深めることの重要性を痛感するに至った。

そこで、カンファレンスを通して教師同士が多様見方を突き合わせ、幼児理解を深めていくことにした。

2. 研究の方法

- 事前研究会…指導案をもとに、人・もの・こと・自分とのかかわりの視点から、子どもの表現について検討する。
- 研究保育…対象児や対象場面を観察記録し、視点に沿って分析考察する。
- 保育カンファレンス…担任の自評や観察者それぞれの記録をもとに協議する。
- 事後研究会…保育カンファレンス後、各自、観察場面を再考察し、それをもとに協議を深める。

3. カンファレンスの事例

- 期日…5月16日(月)
- 対象場面
《5歳児たんぼぼ組研究保育 5月14日(土)》

初めは巧技台にビームをつなげ長くしていくだけだった遊びが、仲間が増えることで新たなアイデアが生まれ、周回できるようなコースができていった。そこでは、電車が通る、高速のETC、ビームの下にはワニがいるなど、それぞれが自分なりのイメージで渡ることを楽しんでいて。その後、一人の男児がワニになって、周回する子どもたちの動きを遮るような行動を取り始めるが、それに周りの子どもたちが反応し面白がり、ワニの登場を自分達の遊びのイメージの中に取り込みながら、それぞれの遊びを楽しむ姿が見られた。

○カンファレンスの視点

巧技台のコースでの遊び場面で、一人一人が楽しんでいたり表現していることを探る。

○カンファレンスから

- ・単純なコースをただ歩いているだけのように捉えていたが、一人一人がその子なりにイメージや思いをもって遊んでいることに気付かされた。
- ・遊びのイメージはバラバラでまとまりがないように見えたが、子ども同士のイメージが初めから一致しているわけではないこと、整理されていないから面白いということも捉えられていなかった。また、子どもたち同士で少しずつ少しずつストーリーを作りだしていくということに気付かされた。
- ・ともすると教師のイメージで遊びを進めてしまっていることがある。遊びがスムーズに展開することが保育の目的ではない。一人一人の内面が確かに育っていくためには、一人一人の内面を深く捉えた教師のかかわりが必要なのだと改めて思った。

4. 成果と課題

- 保育カンファレンスを通して、幼児理解の幅を広げ、一人一人の幼児の内面をより丁寧に深く捉えようとするようになった。
- その一方で、子どもの自己の発達を支えていくためには、内面の充実につながる遊びを育てていくこと、そのための環境を構想しつくり出していくことが課題となった。

平成24年度研究主題

学びの基礎を培う学びの充実を目指して
— 保育環境の意味を問い直す —

1. はじめに

学びの基礎は、子どもが主体的に環境にかかわり、遊びを生み出し、遊びが充実してく中で培われる。子どもの主体的なかわりは、心揺さぶられるような魅力的な環境との出会いによって生まれるものである。しかし、子どもが環境とかわって、それに意味を見いだしていくかどうかは、子ども自身に委ねられる。そのために、教師が意図した環境であっても、子どもに取り込まれなかったり、逆に偶発的な出来事が意味あるものとして子どもの中に取り込まれ、生き生きと遊びが展開されることもしばしばである。大切なことは、子どもが環境とかわる中で、子ども自身がそれを内なるものにしていくことである。

そこで、平成24年度は、副題を「保育環境の意味を問い直す」として、子どもが環境とどのようにかわり、意味を見いだしたり、内面の充実や変化につなげたりしていくのかを探ることにした。

2. 研究の内容と方法

- 日常の子どもの遊びや生活の様子、研究保育での子どもの遊びの姿を記録し、保育環境との関係性を捉えて分析考察し、事例にまとめる。
- 事例をもとにした保育カンファレンスを通し、保育環境の意味について理解を深める。
- 保育環境を見直すとともに、指導計画や保育環境の改善につなげていく。

3. 事例 年長児6月

自分で導き出した泥だんごレシピ

泥んこ遊びは見慣れているものの、「うわ！派手に汚したなあ。」と思うほど、泥んこになって土と水をかきまぜているA児。

そういうことが数日続いている今日、森のキッチンに行ってみると、A児はそれほどドロドロにならずに、泥だんご作りをしている。

「Aちゃん、おだんごおいしそうに作ったね。どうやって作ったの？」と声をかけると、

「まず、泥だんご作るの。おだんご作るとき、

2回水を入れるとちょうどよくなる。3回入れるとダメなの。」という返事が返ってきてビックリ！

そこで、「2回？へえ！！2回って、何で入れるの？」と聞くと、

「おたま！おたまの、30（おたまについている目盛り）を満タンにして入れる。3回だとダメ。（おたまを）満タンにするとダメなの。おたまの30と30で、60入れないとダメだよ。」と言うので、感心してしまった。

「へえ、Aちゃんすごい発見だね。30を2回入れるといいんだあ！すごいこと発見したねえ。」と言うと、A児は得意そうに笑った。

「じゃあ、土は？」と聞いてみると、

「土はね、このボールに半分ぐらい入れるといいの。そして、水はおたまで2回。後、赤い土も少し入れるといいの。」などと言いつつ、手には、粘土のようになったちょうどいいかたさの土を持って、泥だんごを得意げに作って見せてくれたA児だった。

【考察】

- ・A児は、腰を落ち着けてじっくりと遊びに取り組むことがなく気になっていたが、この泥遊びはA児の心を惹きつけたのか、熱中して取り組んだ。
- ・土と水を入れ泥水を作りかき回すという行為を、何回試も繰り返し、自分が作りたい泥んこのやわらかさや水加減などを見いだしていく。
- ・土や水との対話を楽しみながら夢中になって遊ぶ中で、様々な発見があり、喜びがあり、その喜びを友達や先生にも伝えたいという思いが高まっていくのを感じた。先生や友達に認められることで、自分への自信をさらに深めている。

4. 成果と課題

- 遊びと保育環境との関係をより意識的に捉え、環境の中に潜む多様な意味や価値に気付くようになった。何を楽しんでいるのか、どんな思いで環境とかわっているのか、子どもの内面を理解しなければ、保育環境を理解することはできないことを痛感した。

平成25年度研究主題

学びの基礎を培う学びの充実を目指して

—保育環境の意味を問い直す—

1. はじめに

平成24年度は、子どもが保育環境とどのようににかかわり、意味を見出し、内面の充実や変化につなげていくのかを探るところから研究に取り組んだ。(保育環境とは、もの、空間、友達、教師、自然、園の生活・文化、社会事象、家庭や社会の生活・文化、時間、雰囲気、状況等、子どもを取り巻く「人」「もの」「こと」すべてを指す。)

保育環境と子どもが環境にかかわって生み出す遊びとのかかわりを丁寧に探る中で、改めて保育環境ひとつひとつには多様な意味や価値があることに気付かされた。例えば、園庭の固定遊具のひとつである「風車」にかかわって遊んでいた年長児の遊びの記録をもとに、「風車」のもつ意味や「風車」にかかわる子どもたちの遊びの意味などについて探ってみたところ、考えたり、試したり、工夫したり、体を動かしたり、人とコミュニケーションしたりなどしながら、自己を形成したり、人間関係を築いていく場になっていることに気付かされた。「風車」という物的環境としての意味、場のもつ意味についての理解を深めることができた。また、子どもが遊び込み、遊びに没頭していく場面を丁寧に読み取っていくと、子どもの遊びの中に面白さを見出し共感的なかわりをする教師の存在、その場でいきいきと遊んでいる友達の存在、またその人たちが集う中で醸し出される雰囲気といったように、環境としての人の存在の意味や多様なことが絡み合って生み出される状況性などが大きいことなどに改めて気付かされ、遊びの充実と保育環境との関係は、より多面的・重層的に捉える必要性を感じた。

そこで、今年度は、遊びと保育環境との関係をより丁寧に多様な視点から捉え、遊びの充実につながる保育環境を探ることにした。

2. 事例 年少児6月

左手にビニール袋を大事そうに握り、三輪車に乗ってきたK児は、「Kちゃん、いいもの、みつけ。見て!」と言いながら、ビニール袋を教師に差し出してきた。ビニール袋には桜の実が5、6粒入っていたので、「サクランボがいっぱい入っているね。」と声を掛けるとにっこりと笑顔になり、その後三輪車で森の方へと

向かって行った。

森の奥の桜の木のところまで来ると三輪車を降り、棒を持ってダンゴムシを探し始めたが、桜の木についている樹液に目が留まり、「これミツかなあ。」とつぶやいた。教師が「これに、カブトムシがきてごはんを食べるかもね。」と応じると、K児はにっこりと笑った。

K児は、ジャングルジムのところにお気に入りR児を見つけると、嬉しそうに、「Rちゃん、カブトムシのごはんあったよ。ちょっとこっちに来て。」と声をかけた。R児には、「だめ。ここであそびたいの。」と断られたが、再び桜の木の樹液を棒でつつき、「とれた。ねばねばしている。」と言い、次に桜の葉を取り、そこに付けながら「くっついた。」「葉っぱおちた。」などと試す姿が見られた。

先ほどのR児やE児が近くにやって来ると、「こっち来て。とったよ。ほら、なんかこれあったよ。ねばねば落ちた。ほら、とれた。」と声をかける。E児が、「これミツじゃないと思う。だってべたべただもん。」、R児「むにゅむにゅ〜ってなってる。」と、それぞれに樹液を見て触って感じたことを自分の言葉で思い思いに表現する。

K児は、自分の発見をR児たちに見てもらい満足そうだった。R児とE児がそこを立ち去ると、K児は再び桜の木をじっくり見て、「こっちは色がついているね。」と言い、樹液の上に桜の葉を乗せた。「葉っぱで隠すの?」と教師が尋ねると、K児は「カブトムシにあげるの。葉っぱがついていても、カブトムシはごはんをみつけると思う。」と答え、細い枝を帽子のつばの上にくっつけ、♪カブトムシ〜カブトムシ〜♪と節をつけて歌いながら、踊り出した。

【考察】

- ・園庭の自然とかかわる中で、桜の樹液など様々なものと出会い、心を動かされたり、自分なりに対象を理解したりしていく姿が見られた。
- ・発見の感動や価値は、人と共有することでより高まっていく。子どもの気付きや発見に意味を見出したり、共感したりしていく教師のかかわりが、子どもの自己肯定感を高めるとともに、自然と出会い、感動したり、不思議に思ったりするなどの感性をはぐくんでいく。

3. 成果

- 「保育環境の意味を問い直す」という研究に取り組む中で、子どもの主体的なかかわりは、心揺さぶられるような魅力的な環境との出会いによって生まれるものであることを改めて確認することができた。

《まとめ》

保育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであり、何よりも幼児の主体性を大切にされたものである。幼児自身が、興味をもって周囲の環境に働きかけ、遊びを生み出し、心ゆくまで遊び、遊びきったという満足感や自己実現の喜びを味わう中で、その子どもにとって意味ある世界づくり、仲間づくり、自分づくりをし、学びを深めていく。

本園では、多様な人・もの・こととの触れ合いを通して、様々な体験を積み重ねていく中で、自分に自信をもったり、自己の可能性のイメージを広げたり、その子らしい自分や新しい自分をつくっていくプロセス自体を学びと捉え、自分づくりを支えるために、遊びの充実を目指し、保育の実践・研究に取り組んできた。

学びの基礎を培う遊びの充実のためには、遊びと保育環境との関係をより多面的・重層的に捉え、一人一人の幼児の体験のつながりを深く理解しながら、意図的・計画的に環境を構成し、体験が学びとなるような援助の必要性を痛感した。

今後、より一層の遊びの充実に向けて、子どもが夢中になっている遊びの背景となる体験を丁寧に捉え、その遊びによってより学びが深まるための、「体験のつながり」について研究を深めていきたい。

参考文献

- 1) 幼稚園教育要領解説平成20年10月
- 2) 「子どもの世界をどうみるか」津守真
- 3) 事例で学ぶ保育内容 領域「環境」